

巻頭言

最近、1950年代や70年代に発表されたいくつかの論文を読む機会がありました。その中で、「え～I。このアイデアはあの人とかあの研究団体に考えだしたとばかり思っていたのに、もともとはここに書かれたことを借りていたのか」というものにいくつも出会いました。いまから20年前にこの事実を知っていたら、これらの教育理論や教育実践に対する見方も違っていたのに、と思いました。自分の不勉強を棚にあげてではありますが、自分の研究がどういう先行研究に触発されたものを論文の中でも研究発表のときにも明示してくれていたら、という思いにかれました。この点アメリカで発行される雑誌に掲載されている論文では先行研究を多面的に紹介してから自分の問題意識をはっきりさせて、その後に本論に入るというスタイルをとるものを多く見受けられます。ひるがえって自分の発表した文章を見ると、先行研究からアイデアをもらっていても批判的取り扱いになると、その部分をはっきり書かない、ということもあります。また、意識できるほどしっかり先行研究の要点を押さえておらず、的確に紹介できない、ということもあります。少しいいわけ風にいえば、個人で多くの先行研究をカバーしきれない、ということもあります。

一昨年ICMEの帰り、アメリカのある研究組織を訪問する機会を得ました。そこではチームを組んでの研究をしていました。研究リーダーの役割がとて大きい、とほんの僅かの時間の訪問でしたが思わされました。短い時間でかなりの成果をあげるために、問題毎に研究チームを組む、ということが日本でももっとひんぱんに行われてもいいように思います。それも仲間内の考えを同じにする人だけでなく、研究手法の違う人も交えてのハイブリッド式研究組織です。どなたか企画してくださる方はおられませんでしょうか。

(森川 幾太郎・山形大学)